

第1回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和8年5月21日（木）10時～15時 参加者：31名（うち市町村等から20名）
会場：秋田県生涯学習センター 講堂

「家庭教育支援チームができることを考えよう」というテーマのもと、今年度最初の研修を行いました。子どもを取り巻く環境について、子育ての姿勢・悩み、どんな支援が期待されるかなど、アンケートの詳細分析から学び、保護者や子どもをサポートするため身につけたい力について、グループごとに意見交流しました。また、スクールソーシャルワーカーの、学校現場における実践例を学ぶとともに、不登校、ヤングケアラー、貧困などの問題事例をグループ協議・発表するなど、一日を通して充実した研修となりました。

【午前の部 ①講話 ②協議】

秋田県生涯学習センターシニアエキスパートの **三浦 歩** が「家庭教育に関する調査の詳細分析から見えること」と題して講話を行いました。令和6年度の調査結果から、保護者は子育てに対する意欲や愛情を高く持っている一方で、親の多忙感やネット・メディアへの強い不安を抱え、子どもへの手本意識が過去10年で半減している実態が紹介されました。参加者は現状と課題について学ぶとともに、孤立化を防ぐための居場所づくりや、年齢層に応じたピンポイントの支援の必要性を改めて実感している様子でした。

後半の協議・演習では、同センター社会教育主事 **和泉 洋介** の進行で、「保護者や子どもをサポートするために身につけたい力」について話し合いました。親が子どもと過ごせる時間が限られている事実が示された後、参加者は自分ができることを考え、思いを「〇〇する力」として付箋に記入しグループ内で共有しました。また、途中で2回席替えをして多くの参加者の意見に触れたことで、各自の考えを振り返り、広げることができました。最後はチーム支援の基盤となる「関係の質」を高める重要性を学びました。



【午前の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・分析の深さに納得させられることばかりでした。
- ・集められたデータから今後取り組むべきことを考えることができました。
- ・保護者の自信が低下しているということがショッキングでした。
- ・グループワークでは、価値観の違いのある意見を聞けて広がりが増え、自分の考えだけでなくチームでやることの重要性を感じました。

【午後の部 講話・演習】

秋田県立秋田明徳館高等学校スクールソーシャルワーカーの **佐藤 秀一** 氏に、「学校現場を通じた家庭教育支援について～学校・家庭・地域の架け橋となるために～」と題してお話しいただきました。講話のはじめに、佐藤氏が初対面の生徒や保護者と接する際、まずは睡眠や食欲といった健康状態などを尋ね、良好な関係性を構築することの重要性が話されました。また、数多くの相談に対応されてきたご経験を踏まえ、近年増加傾向にあるヤングケアラーや不登校、貧困などの具体的な事例を挙げられ、相談援助においては「人を見るのではなく問題を見る」ことや、当事者の感情に巻き込まれずに正しく「共感」することの大切さが紹介されました。

最後に、グループに分かれ、不登校、ヤングケアラー、貧困の3つの具体的事例について対応策を話し合う演習を行いました。佐藤氏からの助言を受けながら、参加者たちは背景を探って専門機関につなぐことの重要性や、保護者が一息つける居場所づくりの必要性について、それぞれの意見をシェアし、個人ではなく家庭教育支援チームとして情報を共有し、対応していく役割について考えを深めていました。



【午後の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・問題が意識を規定する、沈黙の尊重、まきこまれない等、非常に大切な視点を与えていただきました。
- ・お話の内容が分かりやすく、手短にインパクトのある言葉をコンパクトに話されてよかったです。
- ・子ども親子であっても、一人の人格として扱うその具体を様々学ばせていただきました。